



Title	<紹介>大橋毅彦・趙夢雲・竹松良明・山崎眞紀子・木田隆文 編著・注釈『上海1944-1945 武田泰淳『上海の螢』注釈』
Author(s)	鈴木, 晓世
Citation	語文. 2008, 91, p. 102-102
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69128
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大橋毅彦・趙夢雲・竹松良明・山崎眞紀子・松本陽子・木田隆文 編著・注釈『上海1944-1945 武田泰淳『上海の螢』注釈』

鈴木 晓世

本書は、武田泰淳『上海の螢』（「海」一九六七年二一九月）を詳細な注釈と共に読むことによって日本近代における上海体験を再考しようというもので、編著メンバーによる三年越しの共同研究の成果である。作品の舞台は一九四四年夏から四五年六月頃までであるが、泰淳も中日文化協会職員として一九四四年六月から四六年二月まで上海に滞在しており、本作品は「戦時下上海における日本の文化活動を確認する好個の事例であるとともに、小説家武田泰淳の〈中国体験〉を総括する作品」（木田隆文氏）である。とりわけ興味深いのが、石上玄一郎、阿部知一、田村俊子、堀田善衛ら同時期に上海に居住していた日本人作家たちや陶晶孫ら中国の文化人らの活動、メディアや風俗などが作品中に数多く描き込まれている点である。中日文化協会をモデルとする「東方文化協会」に勤める「私」を主人公としているため、中国人、日本人、白系ロシア人、ユダヤ人による文学・演劇・音楽など多岐にわたる活動模様や交渉／摩擦のあり様、背景となつていて日本对中国文化政策が浮かび上がつてくるのである。

大東亜文學者會議の場面での「和平側の中国人たちの胸のうち

（中略）決定的な瞬間。それは、やつてくるだろう」という表現について、竹松良明氏は「遠からぬ日本の敗戦とそれに伴う漢奸肅清を指す事はほぼ確か」と分析し、日本側の出席者である高見順や長与善郎、「闇のグループ」藍衣社への注釈と合わせて作品背景について鋭く踏み込んでいる。また、「雜種」（ツバキ）というモチーフについて、大橋毅彦氏は「人間の相互関係の中に亀裂・分断・差別を持ち込むイデオロギーの暴力性を映し出す鏡ともなれば、そうした体制に向けて投じられる一個の爆弾ともなる」とし、他作品にも同様のモチーフが出てくることを指摘している。

松本陽子氏は、上海到着の日に「私」、或いは泰淳にとつての象徴的な〈中国〉像、憧憬の投影（松本氏）として登場した美しい螢が、作品後半においては夏女士の屍体を食べ尽す「奇怪な夢」となつて再登場することに着目する。この場面での螢は、やかに描き出しているのである。

政治的背景や歴史的事実、モデルとなつた人物にまで及ぶ資料の精査と共に、泰淳の他作品も再読されていく。注釈の積み重ねが、作品の読解をより豊かにしていくという魅力にこそ、本書の積極的な意義があると言えるだろう。

（双文社出版、一〇〇八年六月刊、二六〇頁、五、六〇〇円）
(すずき・あきよ 本学大学院助教)